

「会員短信 78」

「二足の草鞋」

西野周次

私は、中学生の頃からバレーボールに熱中して、選手としての活動は勿論のこと、学生や地域のサークル、ママさん、社会人チーム等々の監督やコーチも歴任してきました。

私と文芸との出会いは、高校生の頃に遡ります。オー・ヘンリーの「最後の一葉」の読書感想文が、図書館報に掲載されたことがきっかけです。気を良くして、「青少年の生活文」や「非行防止作文」等に応募したところ、それらが次々と好成績を収め、全校生徒の前で表彰されることもありました。

[テキスト ボックス]バレーボールに専念する一方で、詩歌の活動も捨て難く、大学を経て社会人になった頃には、「ぱんの木」という総合文芸誌を立ち上げました。当時は詩を中心にした活動でしたが、短歌、俳句、川柳も齧っていました。ぱんの木を通じて、詩誌「野獣」の山本耕一路氏と出会い、編集同人を担うことによって県内外の著名な文人に相まみえることが出来ました。また、ぱんの木の同人の計らいで、ホトトギス系の「雲雀」主宰の品川柳之先生の句座に名を連ねさせていただき、俳句を学ぶ機会を得ました。

三十路に入って間もなく、行政書士、宅地建物取引士の資格を取得し、一念発起して会社を立ち上げました。爾来、仕事に勤しみ乍らも、文芸とりわけ俳句に励む日々となりました。まさに二足の草鞋を履いての生活です。句集『遠白帆』の上梓をきっかけに八木健会長とのご縁を深め、滑稽俳句協会の皆様と出会い、切磋琢磨させていただいております。